# 燃建館だけり



保春院没後400年記念「保春院ご尊像鑿入れ式山形会場」

- 新発見の最上義光文書について
- 専称寺所蔵大崎夫人像について
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No.12
- 最上義光連歌の世界⑥
- 研究余滴② 義光のまなざし



# 新発見の最上義光文書について

鈴木

て、来訪された。
なの写が入った蒔絵の箱を持参し体とその写が入った蒔絵の箱を持参し嵐義一氏が川野博資氏と共に、文書本

あった。 意の美術商から入手したとのことでられるものの正しく義光の判物で、懇

今後の取扱いについては一任すると を施して文書の修復・保護を図ること を施して文書の修復・保護を図ること を施して文書の修復・保護を図ること

ちなみに、五十嵐氏は現在、西村山ちなみに、五十嵐氏は現在、西村山の人であり、頼りがいのある仲間であれ、歴史文化資史料については、極めれ、歴史文化資史料については、極めれ、歴史文化資史料については、極めれ、歴史文化資史料については、極めれ、歴史文化資史料については、極めれ、歴史文化資史料については、極めいのある仲間である。

月二十六日(金)、山形新聞に『最古のし、裏打ちも一応の見通しが立った二関する貴重な新史料であることが判明関する貴重な新史料であることが判明

知るうえで欠くことのできない史料

されることになった。

され、朝日)入手』との見出しで掲載さん(朝日)入手』との見出しで掲載期待」、一五七二年に家臣へ、五十嵐

段階に再考を促すことになったこと。

私たちは、この新史料を「五十嵐義上義光宛行状」と呼ぶことにした。最上義光宛行状」と呼ぶことにした。その写真と一応の読みを示せば、左

宛行状であること。以下、若干の考察を加えてみよう。

・永禄十三年(一五七〇)立石寺宛最上義光願文(言上状)に続く、二通目のA型花押(武田喜八郎氏の分類『山形市史・最上氏関係史料』による。『山形市史・最上氏関係史料』による)であり、A型花押を据えた義光宛行は極めて少ないこと(松尾剛次氏は一一例、安部俊治氏は一二例とする)。一元亀三年(一五七二)最上義光宛行・元亀三年(一五七二)最上義光宛行・元亀三年(一五七二)最上義光宛行・元亀三年(一五七二)最上義光宛行・元亀三年(一五七二)最上義光宛行・元年でかいる。写としてもそれは極めて重要で、義光の家督もそれは極めて重要で、義光の家督相続段階の領国支配や家臣団形成を

として活用されてきた。しかし現在、この写しの実物は失われたとされてこの写しの実物は失われたとされていること。 ・これまで立石寺願文(言上状)に続いてこの影写本の花押が、A型花押の変遷が論ぜられてきた。しか花押の変遷が論ぜられてきた。しかとにより、自筆か版刻か、その変化とにより、自筆か版刻か、その変化とにより、自筆か版刻か、その変化

・元亀三年に最上義光が、こうした宛 行状を多数発給したに違いないこと は、これまでも予想されていたが、 それが実証されたこと。しかも三月 十七日と同月日であり、その日に特 別な意味があることも予想されるに 至ったこと。

・内容は、六槲之内の、槲はかしわ又はくぬぎのことであり、現在の六椹はくぬぎのことであり、現在の六椹はくぬぎのことであり、現在の六椹はくぬぎのことであり、現在の六椹城三の丸の拡張整備に伴い現在地城三の丸の拡張整備に伴い現在地域三の丸の拡張整備に伴い現在地域三の丸の拡張整備に伴い現在地域三の丸の拡張整備に伴い現在地域三の丸のが、東原の地名も室町以考えられるが、東原の地名も室町以表しい。

あったか、明らかにする必要が一層張・東原の辺りは如何なる様子で如何なるものであったか、六椹や吹このことから、戦国期の山形城は

てのおだ、六椹八幡の在、おこことのであることのできたことの

ただ、六槵八幡の神主八郎 (神保氏) については、天正九 (一五八一) 義光が二五〇刈を宛行っていたことが知られている (専称寺文書)。こが知られている (専称寺文書)。こが知られていたが、の場合、八東で一刈とされていたが、の場合、八東で一刈とされていたが、

六槲之内(田)一、五五○刈に、 成敗致す可く候者也、とあることか 加恩としている。 れまでの研究では「加増」と解釈さ た)、問題は「相添候」である。こ 氏は田一〇〇刈を一反、北条氏は畑 畠は約二反と一応しておく。(上杉 ら、宛行われた田は約一町五反五畝 原畠地二〇〇(文)地を相添える。 れる。最上氏は、加増の場合は加増 無く新たに家臣を召し抱えたともと てとも読める。そうすると加増では 五〇刈に東原の畠地二〇〇文を添え れてきた。しかし、本貫の田一、五 に、相続するに当たり加増したとさ れており、家督相続以前からの家臣 一反を一五〇~二〇〇文としてい

は判明しない。
要達藤三郎につながる人物かどうか要達藤三郎につながる人物かどうかの安達藤三郎は如何なる人物か

(西村山地域史研究会 会長)

六槲之内千五百五十 かり、

最上義光宛行状(元亀三年三月十七日)安達藤三郎宛

東原畠仁百地相添

不不自己了百世代

可致成敗候者也

義光 (花押)

安達藤三郎殿

版刻は版木に刻まれている。

えをうつ

元亀三年三月十七日

花押はA型・版刻花押

タテ四・五㎝、ヨコ六・○㎝ A型花押は、武田喜八郎氏の分類 (山形市史・最上氏関係史料)による。

タテ三○・六㎝、ヨコ四九・四㎝の竪 紙、紙質は楮紙カ。

六槲(ろっこく) 槲はくぬぎ・かし

# 専称寺所蔵大崎夫人像について

松尾剛次

□○二一年七月八日、専称寺御住職 本することができた。戦国時代の夫人 像としては、他に織田信長の妹お犬の 像としては、他に織田信長の妹お犬の でるのは戦国期夫人像を考えるうえで も大いに重要であろう。

裏彩色の技法がとられているのであろ 塗られていたと推測される。いわゆる りわけ、絵の裏側を見ると少し厚みが 優れた絵像であることがわかった。と がなかったが、今回実見して、極めて と記す。これまで写真でしかみたこと 腰巻にした、中年で上品な婦人の画像 草花模様の金地交りの着物に、撫子の され、「黒髪を長く後に垂れ、 派の画家に頼んで描かせたものと推測 県の文化財』では、京都の高名な狩野 色彩も極めてよく残っている。『山形 形県教育委員会、二〇〇二、一二〇頁) で、左右の手で数珠を持っている」(山 花模様を細かに散らした白地の上衣を いたかは謎であるが、優れた作品で、 ふんだんに使用することになり、 一・○㎝の絹本著色像である。誰が描 大崎夫人像は、縦九九・〇㎝、横四 裏彩色は、高額であった絵の具を 胡粉など絵の具が後ろ側からも 華麗な

伝わってくる。の依頼者の金にいとめをかけぬ思いが

本絵像に描かれた人物は、最上義光の最上義光の妻の像と考えられる。の正妻大崎殿と考えられてきた(『山の正妻大崎殿と考えられてきた(『山の正妻大崎殿と考えられてきた(『山の正妻大崎殿と考えられてきた(『山の正妻大崎殿と考えられてきた(『山の正妻大崎殿と考えられてきた(『山の正妻大崎殿と考えられる。をは、『山ではなく朱印である。それはともかく、「出羽守内室像」とある。と考えられる。

> られる。 年八月二日に京都三条河原で殺されて 禅宗系の戒名)ももらっていたと考え 窓妙桂大禅尼」という戒名(おそらく 英」という真宗系の法名とは別に「月 崎殿は、大谷教如からもらった「釈妙 窓妙桂大禅尼であった。おそらく、大 代々過去帖」では、大崎殿の戒名は月 は駒姫死後の一四日後に亡くなってい は、他の秀次の妻らとともに、文禄四 禄四年七月に高野山へ追放されて自害 秀次は「謀叛」の罪で秀吉によって文 英」と法名が書かれている。「最上源 て、大崎殿は自害したと考えられる たことになるが、駒姫の横死に関連し いる。八月一六日に亡くなった大崎殿 した。この秀次事件に連座して、 ところで、夫人像の右上には「釈妙

以上のように、本絵像が制作されたと考えられる慶長二(一五九七)年は、に当り、本絵像の作成依頼者であったと考えられる最上義光は、駒姫らの三に当り、本絵像の作成依頼者であったと考えられる最上義光は、駒姫らの三間違いないであろう。また、その年、新路に移して専称寺としたという(『天神路に移して専称寺としたという(『天神路に移して専称寺としたという(『天神路に移して専称寺としたという(『天神路に移して専称寺としたという(『天神路に移して専称寺としたという(『天神路に移して専称寺としたという(『天神路に移して専称寺としたという(『天神路に移して東極』)。駒姫・大崎殿の鎮魂のためであろう。

考えられる。

である。本願寺の第一一代門主の父顕であろうか。教如は、東本願寺派の祖という法名を授けた大谷教如とは、誰という法名を授けた大谷教如とは、誰では、本絵像に裏書きをし、「釈妙英」

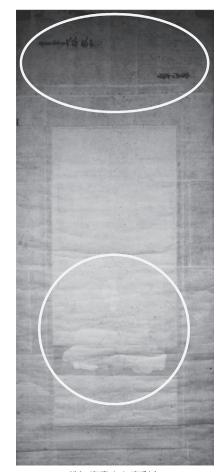
という法名を与え、裏書きを行ったと された。いわば豊臣秀吉によって非業 の教如は、 如は一二代門主の地位から追われた。 四日に亡くなると、一旦は教如が後を 如が、文禄元(一五九二)年一一月二 たと考えられ、大崎夫人に「釈妙英」 きをすることは困難であったと推測さ 年においては、秀吉によって本願寺門 場にあった大崎殿(駒姫像も作成され の死を遂げた人物である。そうした立 それゆえ、本絵像の裏書きをなした頃 譲るように命じられた。その結果、教 秀吉によって、異母弟の准如に門主を 継いだ。ところが、翌二年閏九月には れる。他方、教如は、反秀吉派であっ 主となった准如が法名を授与し、裏書 いだために、秀次事件に連座して処刑 周知のように、駒姫は、豊臣秀次に嫁 教如が裏書きをしたのかが問題となる。 たと考えられる)の肖像画に、慶長二 そこで、なぜ本願寺の門主でもない 本願寺の門主ではなかった。

一方、義光は、秀吉によって駒姫が一方、義光は、秀吉によって原告者でいたはずである。すなわち、本絵像でいたはずである。すなわち、本絵像でいたはずである。すなわち、本絵像でいたはずである。すなわち、本絵像の制作と教如によって裏書きがなされた背景には、秀次事件によって反秀吉然であった教如という、反秀吉者の結びつきがあったのではないかと推測される。

し、家康に保護され、慶長七(一六〇六月、家康に会いに東国へ突然に出奔なお、教如は慶長五(一六〇〇)年



大崎夫人像



教如裏書きと裏彩色



駒姫像

寺教如上人慶長二年」と巻止めの部分 像というものを掲げ、それにも「本願 られる。実際、『山形県史古代中世史 誕生する。 料2資料編15下』二九九頁では、駒姫 に「駒姫像」も作成し寄付したと考え に銘文があるとする。 ところで、 義光は、 大崎夫人像の他

だために、それを参考にしながら後世 現存の「駒姫像」は、原駒姫像が傷ん に制作されたと思われる。他方、『天 なく、絵も大いに新しい。それゆえ、 しかし、現存する駒姫像にはそれが 中巻』などには、駒姫像が載っ

> は残念である。 現在はそれが所在不明になっているの 作させた駒姫像と考えられる。ただ、 ており、それこそ慶長二年に義光が制

方の寺領が寄進され、翌年東本願寺が

二)年には家康から七条烏丸に四町四

また、本絵像制作の背景に、秀吉に強 考えられる。最上義光の駒姫や大崎殿 う二人の結び付きが伺えて興味がつき 作を依頼し、教如によって裏書きされ い憤りを持つ、本願寺教如と義光とい への篤い思いが偲ばれる絵像である。 た二つの絵像が専称寺に奉納されたと とにかく、慶長二年には、義光が制

(山形大学名誉教授)

# 最上義光連歌の世界⑥

## 名子 喜久雄

2 御簾のみとりに明(け)やすき山1 おる花のあとや月みる夏木立

慶長三年(一五九八)四月十九日

賦何墻連歌

初折ノ表

紹巴

義光

角度からの考察である。前回での予告の通り、前回と同じ付け合いへの別

古典文学との関係を論じたい。の考察を行った。本稿は後述する二つの観点に立ち、が興行された慶長三年四月ごろの世情を関わらせてが興行された慶長三年四月ごろの世情を関わらせて

再度、この付け合いの大意を示す。発句は、「桜を手折り春の風雅を尽した後、今ここに夏木立の中で月を楽しんでいる」となる。脇句は、「御簾ごしにこの光景を味わっていると、はやくも時は移り東の山の空が白み始めている」となる。この付け合いは、その場の連衆が目にした光景であることは、連は、その場の連衆が目にした光景であることは、連めの付け合いを鑑賞する時には、以下に示す二つの観点を必要とすると思われる。

語」で、「光景を詠む折には、それを『玉の砌』と思っ基本的創作態度である。藤原定家は「京極中納言相基一の観点は、古典和歌・連歌・俳諧を詠む時の

ても近代のリアリズムとは異なった思考なのであなぞらえて詠め」と語っている。光景を詠むに際しなぞらえて詠め」と語っている。光景を詠むに際して詠め、恋を詠む折には、我身を在原業平の振舞に

第二の観点は、「面影を取る」詠法である。「本歌取り・物語取り」のように、明白に過去の作品・場面に基づいている訳ではないが、何とはなしに作者が意識したと想像される作品・場面を鑑賞者に想起させるという方法である。いずれも古典作品を尊重した詠法である。

実は源氏の子)を守るためにも、政界から身を引想定すれば良いのであろうか。「初夏の若葉の木立想定すれば良いのであろうか。「初夏の若葉の木立想にすれば良いのであろうか。「初夏の若葉の木立の密事が露見して、光源氏は東宮(後の冷泉帝・の密事が露見して、光源氏は東宮(後の冷泉帝・の密事が露見して、光源氏は東宮(後の冷泉帝・以上の観点に立った時、どのような作品・場面を以上の観点に立った時、どのような作品・場面を以上の観点に立った時、どのような作品・場面を

野に着く。(そこで、以下の記述がある) 邸に着く。(そこで、以下の記述がある) の所を離れることを決意する。そんな折、彼は関わりのあった女性である花散里(夏の女として描わりのあった別の女性の家の前を通りすぎていることに気がつく。訪問の意を伝えるが、女はそることに気がつく。訪問の意を伝えるが、女はそることを決意する。そんな折、彼は関き都を離れることを決意する。そんな折、彼は関き都を離れることを決意する。そんな折、彼は関

まづ女御の御方にて(桐壷帝治世の)昔の御物まづ女御の御方にて(桐壷帝治世の)昔の御物まつ女御の御方にて(桐壷帝治世の)昔の御物まで女御の御方にて(桐壷帝治世の)

(傍点筆者)

学げることができよう。 「夏木立」の語そのものはないが(「源氏物語」全 り、前述したように古典作品の「面影を取」ったと り、前述したように古典作品の「面影を取」ったと したら、例えばこの場面を可能性のある箇所として と と と で を が、発句を詠むにあた は に の 素が、発句を詠むにあた

考えを記してみた。
考えを記してみた。

(山形大学名誉教授)

# 表上義光歴史館サポーター No.12 2022年3月

の歴史や文化を分かりやすく児童・生

えながら、最上義光を中心とした山形

# 今年度のサポーター活動は限定的に

現在の歴史館サポーター活動は、歴史館の一部が山形市のPCR検査会場となったことから、館外で行われる、イドは休止となり、館外で行われる、では休止となり、館外で行われる、

意義と担当することの素晴らしさこども講座「ヨシアキ☆すく~る!」の

過去の資料によると、二○一○年に第一小学校と第四小学校で開催したの 第一小学校と第四小学校で開催したの 十二校程度の開催状況で推移し、二○ 二一年度まで延べ百校を超える開催と なっています。歴史館サポーターの活 動としては、館内での案内・ガイドと 動としては、館内での案内・ガイドと 立行して重要な活動となっています。 こども講座の実施目的にあるように、 こども講座の実施目的にあるように、 の基本的なことを学ぶことによって、 郷土学習への興味と関心が喚起され、

す。」こととしています。
いては、生涯学習に繋がることを目指いては、生涯学習に繋がることを目指

地元(学校周辺)に密着した話題を交現場で独自の資料・映像などを活用し、す「義光会」の会員が講師となり、対ブ「義光会」の会員が講師となり、対



では、こども講座を実施した学校から「こども講座に対する意見・感想」を提出してもらい、今後のこども講座を提出してもらい、今後のこども講座を提出してもらい、今後のこども講座と出された意見・感想は、総じて解説・出された意見・感想は、総じて解説・出された意見・感想は、総じて解説・対会科学習、副読本の理解力向上への対待や効果、さらには、学区内の史跡や旧街道を含めた歴史への興味、関心を高めるきっかけとなっていることは間違いないと受け止めています。

さらに、山形という街への関心と郷さらに、山形という街への関心と郷さらに、山形との関わりにおいて、必ずや意義のあるものに

近年実施した中で特に感心させられたことは、開催した学校・クラスの担任の先生が、最上義光とその時代につ会科学習・副読本に取り上げられていることから、自ら生徒・児童に教えるという意識が高いとは言え、副読本にという意識が高いとは言え、副読本による学習にとどまらず、独自の説明資よる学習にとどまらず、独自の説明資本を作成・使用しての学習を予定する



**した。** 等の意欲的な取組には感心させられま

最後に、今年は止むを得ないとはい を受けた児童・生徒が、後日、歴史館 を受けた児童・生徒が、後日、歴史館 を受けた児童・生徒が、後日、歴史館 や現物を見学して、最上義光とその時 代の認識を深めることができないこと は誠に残念なことと思います。歴史館 がいつでも自由に見学できる状態にな ることを、山形市民が待ち望んでいる ることをあらためて考えさせられました。

(峰田記志)

#### 研究余滴②

# 義光のまなざし

片 桐 繁 雄

清和天皇末葉山形出羽守有髪僧義光しいれてんのうまつようやまがたでわのかみうはつのそうよしあき

ものと考えられる。 法の実践者であるという決意を述べた 義光の高い誇りと、慈悲を旨とする仏 として知られ、その子孫は武門の名流 慈の徳高く、釈教に思いを深めた天皇 吟味されていいと思う。清和天皇は仁 いう人物を考えるとき、これはもっと 清和源氏」となった。この十六文字は、 有名な鉄指揮棒の銘である。義光と

義光にはない。 火あぶりにした。だが、こういう話は 耐えかねて一揆がおこると、首謀者を 攻め落として撫で斬りにした。苛政に そもそも同時代の武人は、敵の城を

ういう話ならある。 将の遺児を身内の者に養育させた、そ る敵勢を見逃し、降伏者を受入れ、敵 れないが、それでも、逃がれようとす 義光の戦いにしても凄惨さは避けら

かって義光はこう語ったという。 寒河江・谷地攻略のあと、民衆に向

らん」と感謝したという。(『羽陽軍記』) 人々は「義光公はまこと、民の父母な をいたわって食料を給した。喜んだ 住地を認め、老齢者や身体不自由の者 妻や子をはぐくむがよい」そして、居 はみな安らかに暮らせ。心のどかに、 だろう。だが戦いは終わった。民百姓 「近年は戦さがつづいてみな困った 「出羽守義光は、よく地下人をなつ

> 気づき、進撃したわれわれ直江軍を困 らせた」会津の考証史家はこう書いた。 のせいで最上の百姓共は図に乗って活 け、家臣同様に大切しておられる。そ (『最上合戦記』)

とと思われる。 状況から見て、これは実際にあったこ け」と諭したと「羽源記」にあるが、 第一。城堀の普請は民の草臥になるだ 修を進言したのに対して、「無欲をもっ て民をあわれむは謀(はかりごと)の 義光は晩年、 重臣たちが山形城大改

義光の連歌に、こんな句がある。 ○おくて田は秋更くるまで守りけらし れするのだな) 、晩生の稲田は、 秋遅くまで手入

○かすかなる水もや末に分かつらん 分け合うのだ) (炎暑。百姓たちはわずかな水も

○深田をば作りもやらず荒らしおき ○あぜ伝う深田の末の崩れ沿 まった。気の毒に…) (立派な水田も、豪雨で崩れてし

あたたかに注がれているのだ。 義光のまなざしは、人々の暮らしに ず荒らしている。主人が病気なの か、それとも死んだのか) せっかくの美田を手入れもでき

祈りいたします。 もに感謝申し上げ、謹んでご冥福をお 義光研究の多大なご功績を讃えるとと 十五日に逝去されました。先生の最上 義光歴史館事務局長)は令和四年二月 片桐繁雄先生(長谷勘三郎/元最上

### 1 展示事業

#### (1)

で特設展示を行います。 設展示して紹介するとともに、 山形城関係資料等から選定したものを常 当館の収蔵品を主に、最上家関係資料と 4テーマ

①特設展示 第一部

賜りました。この講話が先生の最後の講話になりました。なお、式に先立って、片桐繁雄先生から記念のご講話を

メージを払拭する機会としました。

である山形でも尊像の「鑿入れ式」を行い、保春院と政宗 する「保春院さまプロジェクト」を立ち上げました。 三三九年)にあたるため、菩提寺の保春院(仙台市若林区)

当館では、そのプロジェクトを招聘し、保春院の出身地

が人物像を紐解き後世に伝えるために、木製の尊像を制作 院(お東の方/一五四八~一六二三)の四〇〇年忌(没後

令和四年が、最上義光の妹で伊達政宗の実母である保春

そして義光との関係を見つめ直し、戦国の鬼姫や悪女のイ

「山形城ゆかりの絵画」

(4月1日17月3日)

③特設展示 第三部

④特設展示 第四部

(1月-3月)

#### 2 普及啓発事業

#### (1)歴史講座

①こども講座 (小学校出張講座) 関心と理解を深め、愛郷心の育成を図 を学ぶ機会をつくり、郷土史に対する 山形市内の小学校に出向いて最上義光

#### (2) ボランティアに係わる事業

ティーを創出します。 とともに、歴史館を核としたコミュニ 応え、きめ細かなサービスの提供を図る となって、来館者の多様化するニーズに ンティアという形で歴史館のサポーター て歴史館とともに活動する市民が、ボラ を募集します) 最上義光と最上家を啓蒙することについ (年1回サポーター

・ | 義光塾」

・「現地研修会」

※詳細については最上義光歴史館にお問 い合わせください。

ものです。

なお、本稿は生前ご入稿いただいた

令和4年度事業

表紙の写真

#### 常設展示

②特設展示 第二部

「鐵 [kurogane] の美 2022」

(7月6日-10月10日)

ご利用について

が鑿入れされる尊像。

主催・三浦真人保春院住職、片桐繁雄先生(故人)、中央

右から仏師・冨田睦海氏、「保春院さまプロジェクト」

「(仮称) 最上家ゆかりの文書展」

「(仮称) 出土した陶磁器」

#### 10月-1月) 入館料 開館時間

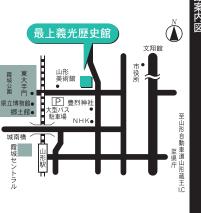
無

午前9時から午後4時30分

休 館日 12月29日から1月3日 月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日)

诵 JR山形駅より徒歩約15分 大手町バス停留所より徒歩ー分

交



### 令和4年3月発行

最上義光歴史館公益財団法人山形市文化振興事業団

nttp://mogamiyoshiaki.jp



印 刷 株式会社大風印刷